

サンプル版

スケベ短編 07 お馬鹿ノンケ 全裸ピンちゃん○ん

作者：金目

目次

製品版概要.....	2
第1話 又治郎のブラちゃん深夜公園.....	3
奥付	11

製品版概要

各話タイトルとプレイ内容

- 第1話 又治郎のブラちゃん深夜公園(ビクビクしながらの野外露出、全裸自撮り)
第2話 カップル覗き見 止まらぬオナニー(青カンセックスをする男女を覗いてのオナニー)
第3話 人生の危機 全裸帰寮のスリル(ビクビクしながら全裸で社員寮を目指す野外露出)

あらすじ

だらしのない金遣いを社則で禁止されている賭け花札で補おうとした又治郎は、目論見が外れ、ツケが積み上がってしまう。

賭け花札の仲間たちに利息代わりに深夜の公園で全裸自撮りをするように求められた又治郎は、ビクビクしながら全裸自撮りを始める。

ビクビクしながら全裸自撮りを行う様子、野外セックスに耽る馬鹿っブルに煽られて、覗き見ながらオナニーに耽る様子、そして、ビクビクしながら全裸で帰寮するしかなくなった又治郎の醜態を描いた短編となります。

このサンプル版では、第1話「又治郎のブラちゃん深夜公園」の全文を掲載しています。

【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実に存在する個人・団体などとは無関係です。

無断転載・私的利用の範囲を超えた共有などの著作権法に触れる行為、なりすまし・模倣を目的としたAI・機械学習への利用などは控えていただきますようお願いします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。

作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いします。

第1話 又治郎のブラちゃん深夜公園

「ほ、本当に全裸で公園を一周しろってのかよ……」

又治郎は、又治郎を取り囲む3人の男たちに問いかけた。

ここは、又治郎たちの馴染みの飲み屋から社員寮への帰り道の途中にある森林公園の北口で、深夜で散策者などいないはずなのに、木々の合間から街灯の光が漏れている。

又治郎を取り囲み、全裸周回を求める男たちは、同じ社員寮で暮らす同室の仲間たちだ。

男たちは、にやにや笑いながら頷いた。

「当たり前だろ、又治郎。」

お前、どんだけツケを溜め込んでいるのか分かってるのか」

「どうせ、金は払えないだろ？」

だったら、俺らを笑わせるぐらい、安いもんだろ」

「これで6ヶ月分の利息をチャラにしてやるんだから、諦めろって」

「6ヶ月分の利息」という言葉に、又治郎は言葉に詰まった。

又治郎には、彼らへのツケがある。

しかも、社内規則、および、社員寮則で重ねて禁止されている賭け花札のツケだ。

加えて、言い出しっぺは又治郎であるため、規則で禁止されている賭け事のツケだから、と突っぱねることもできない。

「まあ、金にだらしが無い癖に、田舎の姉ちゃん相手に見栄を張ったお前の落ち度だ」

男の一人に肩を叩かれ、又治郎は肩をしかめた。

男の指摘は正しく、これから利息代わりに公園を全裸で一周させられる側である又治郎も、これには反論できなかった。

同室の仲間たちの指摘通り、又治郎の金遣いはだらしが無い。

社員寮に住んでいる限り、家賃や水道光熱費や社会保険料は差引かれるから、と飲み歩いたり、風俗で遊び歩いたりしていた。

当然、預金なんてものはほとんどない。

就職する際に田舎の姉ちゃんにきつく言われて作っておいた定期預金の50万円に毛が生えた程度の預金額だ。

だというのに、又治郎は田舎の姉ちゃんへの仕送りをしている。

姉ちゃんが暮らしている田舎の実家が台風で破損し、その修繕費が田舎の両親や姉ちゃんのやりくりだけでは追いつかなかったのだ。

重ねて言うが、又治郎の預金額は定期預金の50万円に毛が生えた程度だ。

そんな預金額で仕送りをするのなら、だらしの無い金遣いを改める必要がある。

けれど、悪癖は治そうと思って簡単に治せるものでもない。

又治郎自身、金遣いを改めよう、とは思ってきた。

けれど酒屋でいつもの酒を見かけるたび、スーパーで好物の馬刺しを見かけるたび、馴染みの店の風俗嬢から営業メールが届くたび、又治郎の節約への決意はどこかに消えてしまう。

儉約の決意が又治郎の元に戻ってくるのは、レシートや領収書を握りながら後悔してい

るときだ。

結局、又治郎は金のやりくりに関り、同室の仲間たち相手に賭け花札を提案した。

そして、皆が寝静まった頃に、国道を走る大型車の音を聞きながら、賭け花札に耽ったのだ。

その結果が、6ヶ月分の負けのツケであり、ツケの利息代わりに余興として求められた、公園の全裸周回だ。

「……本当に、その、本当に利息をチャラにしてくれるのか？」

又治郎は男たちに確認をする。

「もちろんだって。

1周してきたら利息をチャラにしてやる。

「今のお前からツケをむしるのは無理だからな。

お前が恥ずかしい顔して戻ってくりや、利息をチャラにしてやるって」

「お前の金遣い、治りそうにないしな。

それなら、金よりも身体で支払ってもらうしかないしな。

ちゃんとやったら、利息はチャラにしてやる」

男たちは力強く頷き、利息をチャラにすると明言する。

社員規則や社員寮則に隠れて賭け花札に興じていた仲間たちの言い草は、「又治郎の金遣いについて手の施しようがない」という確信、あるいは放逐である。

けれど、クレーン車の運転技術はともかく、金遣いがだらしない又治郎は、仲間たちの言葉に込められたニュアンスにも気がつかず、「利息をチャラにする」という言葉しか見えていない。

利息をチャラにされても、花札の負けのツケ自体が残っている限り、今後も同じようなことを求められるということにも、気がついていない。

「……分かったよ」

又治郎は、頷いた。

そして、服を脱ぎ始めた。

社名が入った作業着を脱ぎ、中に着ていたTシャツも脱ぐ。

だらしない酒の飲み方をしている割には、又治郎の上半身は、それほど弛んでいない。

筋肉に脂肪が乗っているが、今のところは弛んでおらず、パッと見る限り、大胸筋と脂肪の差など見分けがつかないだろう。

腹周りは指で摘まめそうなくらいで、健康診断で肥満予備軍と指摘されるほどではない。

又治郎の上半身は、ギリギリとはいえ、数値上は標準と呼べるラインだ。

体毛は、同年代の男と同程度に生えており、特に濃いわけではない。

風俗嬢からの評判は「男らしくて素敵」であり、「毛深い」とか「汗臭そう」といった否定的な意見を、又治郎は聞いたことがない。

続いて又治郎は、ニッカーボッカーを脱ぎ、トランクス1枚になる。

風俗に通うときは、見栄を張ってちょっと高いブランドもののボクサーパンツを穿いているが、日常的にはワゴン販売されているまとめ売りのトランクスを愛用している。

トランクスのよれたゴムに手をやった又治郎は、そのままトランクスを下ろすことがで

きなかった。

全裸になることが恥ずかしかったのだ。

「おいおい、もったいぶるなよ、又治郎！」

「そうだよ、もったいぶるほどのモンじゃねえだろ、又治郎！」

「風俗の嬢ちゃん相手には、さっさと脱いでんだろ、又治郎！」

仲間たちに囃し立てられ、又治郎は肩を震わせた。

「さ、騒ぐなよ！」

人に見られたらどうするんだっ！」

又治郎は周囲を見回しながら、震える声で仲間たちに注意をした。

公園の北口周辺は、畑が広がり、作業小屋の奥に閉店している野菜の直売所が見えるぐらいだ。

又治郎が見回した範囲では、仲間たちの他に人はいない。

「ビビリだな、又治郎」

「ほら、早く逃げよ、又治郎」

「それとも、利息、支払うか？」

仲間たちに重ねて求められた又治郎は、ぎゅっと歯を食いしばった。

全裸周回を目撃される可能性への不安と、賭け花札で積み上がった負けの額が、頭の中でぶつかり合う。

負けの額を考慮すると、利息だけでもチャラにしてもらわないと、そのうち限界が来る。

……考えてみれば、わざわざ深夜の公園に来る奴が、又治郎たちの他にいるだろうか？

いや、そんな物好きはいないだろう。

それなら、利息だけでもチャラにしてもらった方がいいだろう。

決断した又治郎は、よれたゴムを強く握り、一気に膝下まで引き下ろした。

ぶるん。

又治郎の股間で、小さくまとまったチンポがちょっと震えた。

ずる剥けではあるものの、サイズは平均的で平凡なチンポだ。

これから全裸で公園を1周しなければならぬことへの緊張からか、又治郎のチンポは縮み上がり、玉袋に細かいしわが沢山浮いている。

トランクスを足から引き抜いた又治郎は、両手でチンポを覆った。

「おいおい、隠すなよ、又治郎」

「俺らがお前に無理強いしているみたいだろ？」

「又治郎は、利息の代わりに全裸で公園を1周させてほしいんだろ？」

仲間たちが、両手でチンポを隠す又治郎を笑い、手をどけろ、と求める。

「くっそお……」

又治郎は、花札で金を巻き上げてやろう、と画策した過去の己の甘さを呪った。

それから、諦めて両手を離した。

又治郎の股間ではチンポが縮み上がったままだ。

チン毛が濃く、もさもさとしているため、チンポが紛れて余計に小さく見える。

又治郎が脱いだ服を、仲間たちが汚物を摘まむように指先で拾い上げて、スーパーのビニール袋に突っ込んでいく。

又治郎の作業着を摘まみ上げた仲間が、「おっと」と呟き、ポケットに手を突っ込んだ。

そして、作業着から又治郎のスマートフォンを取り出した。

「俺らはここで待っているから、証拠写真を撮影して来いよ」

「チェックポイントは3か所な」

「駐車場と、東屋横の自動販売機、あと、噴水前のベンチな」

「ちゃんとフラッシュをつけて自撮りしろよ」

スマートフォンを差し出された又治郎は、右手でスマートフォンを受け取った。

「……俺の自撮り画像なんか、どうするんだ？」

又治郎の疑問に、仲間の一人が答えた。

「いやあ、全裸のおっさんと一緒にいるところなんて見られたくないだろ」

「けど、きちんと公園を全裸で周った証拠は欲しいってだけだ」

仲間の説明に、又治郎は溜息をついた。

又治郎たちが今いる場所は、公園の北口である。

駐車場は公園の外周を右手に進んだ先にある。

東屋は駐車場から公園を横切った高台にある。

そして、噴水は、この公園の中央に位置する。

公園全体を周る必要がないとはいえ、公園の西と中央と東に自撮り撮影ポイントを設定されてしまったのは、ある程度の距離をフルチンで歩くしかない。

何なら、適当な茂みに隠れ、適当に時間を過ごし、「一周してきた」と主張することもできない。

抜かりがないなあ……

又治郎は仲間たちの指示の的確さを恨めしく思った。

土木工事において、そうした抜かりのなさや事故防止の観点から大事なことである。

けれど、仲間内での取り立てにまで発揮することはないだろう、と又治郎は恨めしく思う。

「ほれ、さっさと行ってこい」

仲間の一人にケツを叩かれ、又治郎は顔をしかめた。

「ちゃんと画像を確認したら服を返してやるからな」

「ちゃんと戻って来いよ」

「露出のスリルにハマるなよ」

「ハマるか、馬鹿野郎」

仲間たちの軽口に反論をし、又治郎は早足で駐車場に向かって公園の外周にある散策路に進んだ。

振り返っても仲間たちの姿が見えなくなったところで、又治郎は左手でチンポを覆った。

元々、平凡なサイズでしかなく、全裸で公園を歩くことへの緊張で縮み上がっている

ため、左手だけでも十分にチンポを覆い隠せる。

又治郎は右手にスマートフォンを持ち、左手で縮み上がったチンポを隠した姿で、散策路を早足で歩く。

こんな公園に、それも夜遅くにわざわざ来る物好きなど、又治郎たちの他にはいないだろう。

それでもなお、誰かに目撃されたら、と想像するだけで又治郎は不安に襲われ、チンポが縮み上がる。

「さっさと済ませないとな」

又治郎は呟き、早足で駐車場を目指す。

街灯に照らされている散策路は無人で、人はおろか、野良猫の姿もない。

弛むほどではないが、脂肪に覆われたムチムチ体型の男が、周囲を見回し、左手でチンポを隠し、ビクビクとしながら早足で移動をしている様子は、情けないものだ。

早足で歩く又治郎のケツ肉が、又治郎の早足に合わせてブルブルと揺れている。

「ふう、そろそろ駐車場だな」

駐車場と散策路を隔てるポールが見えてきたことに、又治郎はホッとした。

そのまま、右手にスマートフォン、左手はチンポを覆ったまま、駐車場と散策路の境まで進んだ又治郎は、駐車場の先に二階建てアパートの窓の明かりを見て、ゾッとした。

又治郎と仲間たちが入った北口の周囲は、畑しかない。

だから、公園の周囲は畑しかない、と思い込んでいる自覚すら、又治郎にはなかった。

けれど、公園の駐車場の先には、二階建てアパートの明かりが見える。

明かりが見えるということは、まだ起きている住民がいる可能性があり、住民が窓の外から公園の駐車場を見下ろしたら、又治郎が全裸でいるところを目撃されてしまう。

「……どうすりゃいいんだよ」

又治郎は呟いた。

仲間たちは、「自撮り画像を撮影したら服を返してやる」と言った。

つまり、野外露出の証拠である自撮り画像を撮影しなければ、仲間たちは服を返さないだろうし、賭け花札のツケの支払いを強硬に求めてくるかもしれない。

花札に限らず、社員同士の賭け事は社内規則や、社員寮則で禁止されている。

だから、法律でどうこう、とされることはないはずだが、社員には社員の仁義がある。

その仁義を破れば、又治郎が干され、孤立することは確実だ。

……社員同士で干され、孤立し、それを管理職に見咎められれば、何があったのかを調査されてしまう。

そうなれば、賭け花札のことが露見してしまう。

禁止されている賭け事に興じたことが露見すれば、又治郎は解雇されるだろう。

「やるしかないか」

又治郎は諦めを呟いた。

そして、左手でチンポを覆ったまま、散策路と駐車場の境に立ち、ゆっくりと駐車場を覗き込んだ。

「おいおい……」

又治郎は顔をしかめた。

二階建てアパートの明かりにビクビクしていて気がつかなかったのだが、駐車場の一角に乗用車があった。

エンジン音もなく、ライトも消えているため、駐車されており、中に人の姿は見えない。だが、外から見えないだけで、車の暗がりの中で、誰かが潜んでいる可能性は否定できない。

「こんな夜遅くに公園に来る馬鹿がいるのかよ」

又治郎は、己の状況を棚に上げ、文句をつけた。

又治郎と、仲間たちの他に人はいないと思っていたからこそ、又治郎は全裸周回を受け入れたのだ。

だが、この公園に誰かがいるのならば、話は変わる。

もしも、全裸で歩き回る又治郎を目撃され、通報されたら、又治郎は破滅してしまう。

又治郎は顔をしかめ、右手に持ったスマートフォンを見下ろした。

仲間たちに連絡をし、中止、もしくは、条件の緩和を求めたらどうなるだろうか？

……いや、この問いは無意味だ。

又治郎は諦める。

又治郎は、賭け花札の負けが嵩んでいる。

ここで利息だけでもどうにかしなければ、近いうちに又治郎は金のやりくりが限界を迎え、定期預金を解約するしかなくなるだろう。

これまでの又治郎の行動を振り返れば、定期預金の 50 万に手を出したら、間違いなく、又治郎は破産まっしぐらだ。

それだけは、絶対に避けなければならない。

そのためには、金を出さずに利息だけでもなんとかしなければならない。

「やるぞ」

又治郎は、己を鼓舞するために、左手でケツをスパンと叩いた。

平手の衝撃で、又治郎のケツ肉がブルルと揺れる。

一方、縮み上がった又治郎のずる剥け陰茎も、しわが寄っている玉袋も、ちっとも震えなかった。

又治郎はもう一度左手でチンポを覆い、駐車場に入った。

そして、駐車されている車の中に人がいないと信じて、公園側に向き直り、右手に持ったスマートフォンのカメラモードを起動し、自撮りをした。

カシャッ！

「うおおっ！」

スマートフォンの撮影音に又治郎は驚き、漫画のように飛びあがった。

又治郎の全身を覆う、健康診断ではぎりぎり健康なラインの脂肪がブルッと震えたが、縮み上がったチンポは、ずる剥け陰茎だけがちょっと震えた。

又治郎は慌てて公園の散策路に戻り、大きく深呼吸をした。

「はあ……はあ……」

驚かせやがって、なんでこんなにデカイ音が鳴るんだよ」

又治郎はスマートフォンに向かって悪態をついた。

盗撮抑止のためにシャッター音が大きめに設定されていることを、又治郎は知らないのだ。

又治郎はスマートフォンの画像ファイルを開き、先ほどの自撮りを確認する。

全裸で公園周回をしていることへの不安に引きつった又治郎の顔や、健康診断でギリギリ健康となる脂肪が乗った裸体、そして、左手できちんと隠されている股間などが鮮明に撮影されている。

「あ！」

又治郎は大声を上げてから、慌てて左手で口を覆った。

チンポをずっと覆っていたためか、左手はほんのりと臭かったが、又治郎は手の臭さを気にする余裕もなく、身体を不安に震わせながら周囲を見回した。

けれど、又治郎の他に、人による物音もなく、誰かの気配もない。

……たぶん、大丈夫だ。

又治郎はそう判断をし、左手を手から離した。

「あいつら、俺がチンポを隠していたらやり直せっていうだろうな」

又治郎はスマートフォンを見下ろし、ぼやいた。

仲間たちは又治郎に、チンポを隠すな、と言っていた。

その仲間たちが、チンポを隠した自撮りで納得するとは思えない。

……となれば、もう一度撮影をするしかない。

「もう一度、か」

又治郎は呟いた。

不安でチンポだけではなく、下腹部も縮み上がり、ぎゅっとへその下が苦しくなる。

シャッター音があんなに大きいのであれば、公園にいる何者かが又治郎に気がつく可能性があるだろう。

全裸で自撮りをしているところを目撃され、通報されたりすれば、又治郎は破滅してしまう。

変質者として警察に捕まえられ、会社にも解雇されてしまう。

そうなれば、預金もろくにない又治郎は再就職先を見つける前に金がすっからかんになりかねない。

「シャッター音、下げられないか」

又治郎は、街灯の明かりの元、スマートフォンの設定を弄り、どうにかシャッター音を下げられないか、と設定内を探す。

どうしてもシャッター音の消し方が分からない又治郎は、ブラウザで検索をかけた。

「……できねえのかよ」

ブラウザで調べた結果、盗撮抑止のため、シャッター音は消せないようになっていることを知った又治郎は、肩を落とした。

「やるしかねえ……やるしかねえ……」

又治郎は、己をもう一度鼓舞するために、呟く。

そして、大きく深呼吸をしてから左手で握りこぶしを作る。

又治郎は、クレーン車を運転するときのように、己の動きを脳内でシミュレートする。

まず、散策路と駐車場の境にあるポールを抜け、駐車場に入る。

その場で振り返り、右手を掲げ、左手をチンポから離し、即座にシャッターを押す。

いや、これは駄目だ。

急がなければ、と考えているときは、必要な動作を減らした方がいい。

又治郎は首を振り、もう一度考える。

シャッターを押すまでの動作を減らすには、最初からチンポ丸出しで駐車場に入るしかない。

そして、シャッターを押し、自撮りを済ませたら、即座にチンポを隠して駐車場から離ればよい。

……これだ。

又治郎は、頭の中で動作確認を繰り返す。

チンポ丸出しで駐車場に入り、右手を掲げて自撮りをし、左手でチンポを隠して駐車場から離れる。

「よし、やるぞ」

又治郎は呟き、左手をチンポから離した。

そして、早足で駐車場に向かう。

野外露出の趣味のない又治郎は、目撃者がいないとはいえ、公園でチンポを丸出しにしていることを恥ずかしく思う。

小さく縮こまっているとはいえ、早足で歩くと、股の付け根のちょっと下あたりで、縮こまった金玉が擦れるのも気になる。

とはいえ、今はそんなことは無視するしかない。

又治郎は散策路と駐車場を隔てるポールを通り抜け、駐車場に入った。

そして、その場で振り返り、右手を掲げ、己の顔と身体と縮こまったチンポ、背景として駐車場が入っていることを確認し、シャッターを押した。

大きなシャッター音を耳にし、又治郎はへその下あたりがギュッと縮み上がった。

右手を下ろすのに合わせて左手でチンポを覆った又治郎は、そのまま早足で散策路に入り、駐車場から距離を取った。

又治郎は左右を見回し、周囲に人がいないことを確認する。

「はあ……」

又治郎は大きく息を吐いた。

それからスマートフォンのファイルを開き、自撮り画像を確認する。

目撃されることへの不安に引きつった顔や、健康診断でギリギリの脂肪が乗った裸体、そして、縮み上がったチンポが収まった画像の背景には、駐車されていた車も写り込んでいる。

二度も自撮りをしていたのに特に変化がなかったということは、車の中には誰もいなかったのだろう。

又治郎は考えた。

駐車場に乗用車が一台駐車されていたということは、この公園に誰かがいる可能性がある。

又治郎は、その誰かに目撃されずにあと2カ所で全裸自撮りを済ませなければならない。

そうなると、移動経路はどこがいいだろう。

時間短縮のために最短距離を移動するのならば、公園の中を突っ切って東屋に向かえばいい。

けれど、目撃される危険を避けるのならば、いざとなれば隠れることができる植え込みが多い、外周の散策路を移動した方がよいだろう。

思案の後、又治郎は外周の散策路を通って東屋を目指すことにした。

この公園に他の誰かがいる可能性があるのならば、目撃されないように移動をするしかない、と判断をしたのだ。

「さっさと済ませて、利息をチャラにしてもらおうぞ」

左手でチンポを隠したまま、又治郎は散策路を早足で歩み始めた。

奥付

サンプル版 『スケベ短編 07 お馬鹿ノンケ 全裸ピンちん○ん』

作者：金目

初出：2026 年 06 月 21 日

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに 金目堂サークルページ】

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01002299.html

【Ci-en 金目堂】

<https://ci-en.dlsite.com/creator/34371>

【金目堂活動報告】 個人ブログ

<https://kinmedo-diary.sblo.jp/>

支援サイトを利用されていない方向けの案内と不定期の雑記に用いています。

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

https://twitter.com/chigaya_deep

同人誌や支援サイトの更新告知に用いています。